

# 十字路

書評などで接する経営者の愛読書はビジネス書、歴史、自己啓発など幅広いが、同じ本が挙がることも多い。経営者が「文化資本」を共有するという事実は大変興味深い。

米オープンAIで先月起きた経営者の解任と復帰の騒動は、背景に人工知能のリスクを巡る思想の違いがあるという。これまで存在したことのないものが人類の未来に影響を及ぼすとすれば、議論が思想のレベルに達するのも当然だ。その関係者の「リーダーの本棚」をのぞくと、背後に広がる風景がうかがえる。

## リーダーの本棚

当初解任されたアルトマン最高経営責任者（CEO）の愛読書には経営書やベンチャー業界の定番本に加えて歴史書やアウレリウス『自省録』などがあり、そのバランスは日本の経営者に通じる。リアリストの故か歴史書は近現代史だ。総じて、新興企業の危急存亡に向き合ったためのツールボックスといった印象だ。

かたや解任側の複数の理事は「効果的利他主義」に参与が深いというから、その背表紙は想像しやすい。解任側に付いた研究責任者は論文が愛読書でそつで色が少ない。アルトマン氏とともに同社の生みの親でありながら、今年に入り開発の一時停止を求める書簡に共同署名したイー

ロン・マスク氏はどうか。

経営書や歴史書も見えるが、歴史は古代まで遡る文明史だ。そしてアシモフ『ファウンデーション』をはじめ数々のSF。慈善団体がかさどるオープンAIの統治機構にはファウンデーション（銀河系の全知識を保存する善意の財団）を生んだSF的想像力が宿るのかもしれない。

こうしたSFの多くは破滅の危機と救済を巡る物語であり、神話と同じ「英雄の旅と帰還」の構造を持つ。英雄マスケ氏がオープンAIの危機を救いたくてヤキモキする図などを想像しながら年末の読書を楽しむのも一興だろう。（タスク・アドバイザーズ

社長 眞保 二朗）